

父のサプライズ

松田 良弘

ある日、実家の兄から電話があった。父が私達兄弟に頼み事があるらしい。そんなことは珍しいので少し不安だったが、私は休日に実家に帰った。

母が買い物に出掛けると、父は兄と私を呼んだ。

「頼みと言うのは、母さんに内緒で、お前達に木曾駒ヶ岳に登って来て欲しいんだ。」突然の父の言葉に、私達は顔を見合わせた。

「山登りが好きだった俺と母さんは、新婚旅行で木曾駒ヶ岳に登ったんだ。そして山頂で母さんに約束したんだ。その約束を果たす手助けをして欲しい。サプライズってやつだ。この前テレビで木曾駒ヶ岳の番組をやっていて、それを見ていた母さんの顔が、どこか寂しそうだったんだ。」父は母に山頂で、こう約束したそうだ。

「またいつでも登りに来よう。歳を取った時は、おぶってでも君をここに連れて来るよ。」

しかし数年後、母は事故で膝を怪我して、もう登山は出来なくなってしまったのだ。母が登れないのならば、その後父も登山を止めてしまった。

「そこでだ。お前達にビデオカメラで、お前達の目線で登山風景を撮影してきて欲しいんだ。車のドライブレコーダーのような、臨場感のある映像を、母さんに見せてあげたいんだ。登山をしている気分だけでも味あわせてやりたいと思って。本当は俺が行けたらいいんだが、さすがにもうこの歳じゃな。」

残念そうに父は話した。両親の影響か、私達兄弟も登山が趣味だった。何だか面白そうだなという思いと、父の母への想いに心を打たれた私達は、この願いを引き受けることにした。

年が明けた正月、家族全員が実家に集まった。宴会が一段落した頃父は母に、

「母さんにお年玉だ。今から見るぞ。」

とニヤニヤした顔で、一枚のDVDを母に渡した。それは、編集作業が終わり、父のチェックも済んだ、あの登山の様子を収めたDVDだった。いよいよ木曾駒ヶ岳登山の、上映会が始まった。

季節は新婚旅行と同じ十月中旬。ケーブルカーの車窓から始まる映像は、千畳敷カールに着くと、息を飲む様な紅葉の絨毯を映していた。見上げれば、木曾駒ヶ岳が私達を見下ろしている。そしてカールを抜け、険しい岩道を進む。その映像は、今この瞬間、自分が登山をしているように、とてもリアルな景色を映していた。途中の休憩風景や、他の登山者達の笑顔も撮影しながら、数時間後私達は山頂に着いた。父からの細かなルートとカメラアングルの指示通り、私達は無事にミッションを果たす事が出来たのだった。

カメラは山頂の大パノラマを映している。すると、一人の女性の後ろ姿を捉えた。そしてその女性がこちらを振り向いた。カメラがズームする。そこに映っていたのは、なんと母だった。

実は私達は、父に逆サプライズを仕掛けたのだ。父の頼みを引き受けた私達兄弟は、「親父にはまだまだ頑張って貰いたいから、いつそのこと母を連れて行って、母から親父に“喝”をいれて貰おう。」

となつたのだ。木曾駒ヶ岳にも何回か登ったことがある二人でなら、母をサポート出来ると思つた。母に父の想いを伝えると、初めは涙を流して泣いていたが、次に私達の計画を打ち明けると、母は子供のようにはしゃいでいた。

翌日から、母はこっそりリハビリ医院に通院し、スポーツジムにも通つた。おかげで母は、ほとんど自力で山頂まで登ることが出来たのだ。登山当日に母が家を空けるのは不自然なので、父には私から、

「俺が出張ということにするから、母さんに子供の世話を頼んでいいかな。嫁さん一人だと大変だから。」

と伝えていた。そして登山の後、父には事前に母が映っていないDVDを編集して渡しておいたので、さつきこっそりと取り替えておいたのだ。この一大作戦は、家族全員がグルになって遂行された。

「お父さん。気持ちを受け取りました。でも約束は果たせて貰ってませんよ。やっぱりここへは、お父さんと一緒に来たいです。私はもう大丈夫です。お父さんがダメなら、私がお父さんをおぶってあげますよ。」

カメラの前でイタズラっぽく笑う母を見て、父は呆然と口を開けたままだった。

ちちのち

渡部 由真

父は必ず先頭に立ち、必ずわざと転んだ。

運動会的一幕。父はムカデ競争を毎年楽しみにしていた。なにしろスタートするときから、「転びますよ〜」というような顔をして転んでいるのだ。父に似ず内気な私は、恥ずかしくて仕方がなかったが、観客席は大爆笑。みんなの笑顔を見て、父は大変満足そうだった。父は、人を笑顔にすることが生きがいなのだ。

中学校の卒業式、父はPTA会長として来賓席に座っていた。卒業生はたった二十六名。小さな小さな田舎の学校だ。みんな同じ高校へ進学するのに、みんな泣いていた。来賓席をちらりと確認すると、父は大号泣していた。私は、父の泣き顔を見て思わず笑ってしまった。あまりにも泣きすぎだろう。さすが、人を笑わせるのが生きがいなだけのことはある。

高校生になると、人並みに思春期がやってきた。高校三年間、毎朝軽トラで送ってもらっていたが、学年が上がるにつれて、車内の空気は重くなった。ほとんど話もせず、ラジオの音だけがむなしく流れていた。とにかく話したくない。当時は世界一うとうしい存在だった父。そんな父が倒れたのは、高校三年生の夏だった。

夏休み最終日の夜、母と二人でテレビを見てみると、二階からドタバタと音が聞こえてくる。気になって仕方がないので、ちよつと見に行こうと思った時、「お母さん！」と父が叫んだ。母と二人で駆け上がると、汗だくの上、全裸でのた打ち回っている父がいた。どんどん意識は薄れ、呼んでも返事をしなくなった。あれよあれよという間に救急車で運ばれ、自宅から二時間かかる病院で手術をすることになった。医師からは、「最後になるかもしれないので、声をかけてあげてください」と、テレビでしか聞いたことがないようなことを言われた。

十時間以上の手術の間、私は祈りに祈った。大学に行けなくてもいい。夢だった教員になれなくてもいい。神様にも、亡くなった祖父母にも、見たこともないご先祖様にも、とにかく父を生かしてくださいと。また、手術の間、たくさんの人が病院に駆けつけてくれた。というのも、手術には輸血が必要だったのだが、我が家には父と同じO型の人間は一人もいないのだ。二時間かかる田舎や、兄の職場、姉が通っていた専門学校など、ありとあらゆる場所からO型の人たちが集まってくれた。

そんなたたくさんの人たちのおかげで、生きたままの父と再会できた。本当にうれしかった。あんなに煙たがっていた父なのに、ただ生きているだけでうれしかった。父の仕事は農業だが、もう普通に生活することさえ無理かもしれないと言われていたのに、軽トラに乗り、山へ行って再び農業をするまでに回復した。

私はその後、大学へ行かせてもらい、夢だった教員になった。そして、二十四歳で結婚した。夫は非常に無口な人で、父とは正反対である。結婚のあいさつに来た時も、持ち前のサービス精

神でトランクスにランニングという恰好だった父に、夫はクスリともせず、微妙な空気が流れた。しかし、そんなことはお構いなしに、父は私たちの結婚を快く賛成してくれた。

ところが、父はまたもやサービス精神を発揮してしまった。それは、私の結婚式。教え子たちがサプライズで会場に来てくれたのに、父はあろうことか高砂席まで来て、「おい、中学生がいはい来とるぞ」と私に耳打ちをしてしまったのだ。しかし、父は本気で私が喜ぶと思つてわざわざ言いに来たのである。私はサプライズに気付かないふりをして、大いに喜んだ。知っていても、子どもたちの登場には胸がいつぱいになり、隣にいる無口な夫も泣いていた。

そして、花嫁の手紙では夫について、「お父さんとは違い、寡黙な人です。」と紹介した。すると、予想外に会場は笑いに包まれた。おかげで「でも、お父さんと同じくらい私を大切にしてくれる人です。」という、一番大切な部分がかき消されてしまった。「花嫁の手紙で笑いをとりにくく人を初めて見た」と夫にからかわれたが、そんなつもりは全くなかった。昔は全然似ていないと思つていた父と同じ血が私にも流れているのだろうか。そういえば、父とは正反対の夫の血液型はO型だ。

そんなことを考えながら父を見ると、中学校の卒業式と同じように大号泣していた。

祖母の不意打ち

植田 郁子

「この子、五十メートルも泳げるようになったんよ」

母は満面の笑顔で祖母にそう告げた。そのとき母の傍にいた私は十歳。ひと夏中、水泳教室に通ってようやく泳げるようになり、運動音痴の私としては鼻高々の気分だった。

祖母は「よかったなあ」と喜んでくれたが、私はこの祖母が実は大層、苦手だった。

今ではすっかり見かけなくなっただけで、祖母は戦前の躰を身につけた、明治生まれの典型のような女性。私が茶碗にご飯粒を一粒残しても見逃さず、きつく叱りつける。

この日も祖母宅に遊びにきていたのだが、行儀作法に厳格な祖母に一挙手一投足を監視されているようで気が休まらず、私は内心、早く家に帰りたいのだった。

偶然その日は二人の従妹達もやってきた。すぐ下の従妹は秀才、その下の従妹は美形。勉強も運動も器量も人並み以下の私は、二人に劣等感を持つなと言われても無理な話。

居心地の悪さを忍んで彼女達とトランプを始めたが、秀才の従妹が私に尋ねた。

「私、二百メートル泳げる。イクちゃんは？」

自分より年下の従妹が既にそんな長距離を泳げるのかと驚いて、私は恥ずかしさのあまり、咄嗟にごまかしてしまった。

「え、計ったことないし、わからへん」

次の瞬間、まさかの事態になった。近くで編み物をしつつ耳をそばだてていた祖母が、思わず笑って二人の目前で私に言ったのだ。

「五十メートルやなあ」

唐突に嘘がばれて大恥をかいいた私は、顔から火が出るどころか心臓が止まりそうだった。かろうじて握り締めていたプライドを容赦なく奪われて、本当に身の置き所も無かった。

（おばあちゃんは出来の悪い私を馬鹿にしてるんや。私もおばあちゃんなんか大嫌い！）

まだ幼かった私はうつむいて心中で叫んだ。目尻に涙が滲み、悲憤で体が小刻みに震えた。このことは一生忘れないと確信するほど私は祖母を恨み、益々祖母を疎んだのだった。

ところが、その数か月後のこと。

両親が外出したため、否応なく祖母宅に預けられた私は、おやつの後で昼寝をし、夕方になり目を覚まして飛び上がるほど驚いた。

目の前に祖母の胸があった。祖母が添い寝をしてくれていたのだ。祖母は私の片脚を自分の脚の間に挟み、私の顔を自分の胸に寄せて、腕で優しく私の体を抱くようにして寝ていた。母がいつも「おハサミー」と笑って言いながら、そうしてくれていたように。

祖母には嫌われている、と思いついていた私は（これは夢ではないか）と疑った。

ただならぬ違和感も覚えていた。私の脚を「おハサミ」してくれていた母のふくらはぎはムチムチで、匂の大根のようにどっしりと重かったが、瘦せた祖母の両脚はまるで枯れた枝のように軽くて、心もとなかったのだ。

それでも、スースーと気持ち良さそうに眠る祖母の華奢な体から伝わる温もりは、まさしく母と同じ温度、同じ優しさだった。

(ママが子供の頃、おばあちゃんもママの脚をおハサミしてたのか……)

そう思っていたら、祖母が突然「プツ」と放屁したので、私はまたもや仰天した。エチケツトには真に厳しい祖母が、寝ぼけているとはいえ……。私は唾然呆然としたのだが、全身の力が抜けてクスクス笑えてきた。

(なーんや、おばあちゃんかてオナラしてはる。私のこと、お行儀悪いって言えへんやん)

私はこのとき初めて祖母に親近感を持ったのだった。考えれば、私は祖母の娘の娘。だが、従妹達は嫁が生んだ孫娘。どちらも可愛いかっただろうが、祖母にとっては私が最も「遠慮の要らない孫」だったのである。

この全く予想外の快事件以来、祖母は畏怖の対象ではなく、紛れもない「私のおばあちゃん」に変貌を遂げたのだった。

今や私は五十八歳。大学は出たが、バツイチで夫も子も孫も何の取柄も無く、予想通りのお粗末な結果。だが、気楽でけっこう幸せな私に母は時々、祖母の人生を語る。

祖母は子供の頃、成績優秀で勉強が好きだったそうだが、家が貧乏で女学校に進学するのは泣く泣く断念したという。可哀想だったな、と呑気に同情していたら、そういえば、と母が思い出したように言った。

「あなたの大学の学費は、全部おばあちゃんが出してくれはったん。助かったわ」

なんですって！この年齢になってもまだ不意打ちを食らわされるとは。どうやら祖母は私の意表を突くのが大好きらしい。

「おばあちゃん、ホンマにホンマに有難う。来世も必ずまた私のおばあちゃんになってな」

極端に照れ屋で愛想の無かった私のこの言葉は、今頃天国にいる祖母の意表を突いているかもしれない。

おばあちゃん、『おあいこ』や。

なみだの色

永井 和子

なみだ

なみだの色は虹の色

なみだの味は あまずっぱい

ポトンと落ちたなみだの中には

いっぱい いっぱい

いろんな気持ちが入っている

娘が天国に旅立って十数年の歳月が流れ、手つかずの遺品の整理をしている時でした。二十八年で亡くなった娘の遺品の中に、空色の日記帳を見つけたのです。その中には、小学生の時書いたとは思えないすばらしい詩がたくさん残されていました。冒頭の詩の「ポトンと落ちたなみだの中には いっぱい いっぱいいろんな気持ちが入っている」を読んだ時、娘の悲しさや優しさが私の胸にジーンと伝わってきました。七十の齢を越え穏やかになった夫の介護をしている時、フツと、すさまじかった夫の暴力を思い出す時があります。五十年近い結婚生活は、気前のいい夫との楽しい思い出もあるのに、打ちのめされた悲しい記憶は、私の脳のどこかに潜んでいるのです。真面目で仕事に没頭していた夫は、酒を飲むと暴言を吐き私に暴力をふるうのが常でした。若い頃幼い我が子連れて実家に逃げ帰ったのも、一度や二度ではなかったのです。私はよく泣いていました。そんな私を気遣ってくれる優しい娘の書いた詩でした。

毛虫

きらわれものの毛虫 へんな形の毛虫

気もちの悪い毛虫 いろんな苦勞をしたから

あんなにきれいなちようちよになれたんだね

昆虫や毛虫が大好きな娘でした。毛虫を腕にのせて観察したり、学校の参観日に毛虫を持って男の子を追いかけている姿には驚いたものです。この詩には毛虫への優しい愛情、すなわちこの世で虐げられた人達への励ましをも感じました。

本が好きだった娘は中学、高校と順調にいくかに思えました。成績が抜群だったからです。めざす大学受験に向けて一心に勉強していましたが、精神的に追いつめられたのか、ぼんやりと空を見つめる娘の姿がありました。まるでこの詩は、そんな娘を暗示しているようでした。

夢のないつぼみ

造花のつぼみは二度と花を咲かせない

造花のつぼみはずっとずっとつぼみのまま

美しい夢のない悲しいつぼみ

造花のつぼみは 夢のないつぼみ

自室で必死に勉強している娘がいるというのに、夫は仕事のうさを酒ではらし、その大声は勉強する娘の妨げにもなったのでしよう。一言も文句を言えなかった娘は精神に変調をきたし、ついには高校を退学したのです。

しかし、時が経つと娘は図書館に通い始めました。留学する道を見つけたのです。大検で資格を取り、数年後には、アメリカのカレッジへと入学の手続きを取りました。白いブラウスと紺のスカートをはいた娘がアメリカへ旅立つ時の笑顔は、希望に満ちあふれていました。酒乱の父親から離れる嬉しさもあつたに違いありません。留学して毎日明るい声が電話で届くようになりましたが、それは突然の事でした。娘は病魔に襲われたのです。乳ガンでした。すぐにもアメリカで手術してガンを摘出したのもつかの間、帰国して四年後、娘の体は全身がガンに蝕まれていきました。

まさか二十代の若さで命がなくなるなどは、娘も家族の誰もが想像できなかった出来事でした。家族の呼びかけに、「ありがとう」とかすかな息を残して、娘は旅立っていききました。

「お母さん辛い時や悲しい時は待ってればいいとよ。時が解決してくれるよ。そして悲しい事や辛い事は自分の力になるんだよ」

夫から打ちのめされた時、私は何度も娘の言葉に力づけられました。「この世だけが人生ではない、あの世も人生なのだ」と語る娘は今思うと、悟りを開いた老人のようでした。劣悪にも近い我が家の環境で、娘は本から生きる術を学んだのでしよう。残した本の中にすばらしい言葉がありました。「内面的な富を持つていけば運命ものりこえられる」と。

娘は若くして亡くなりましたが、家族に大きな見えない力を残してくれました。絆を強くしてくれました。娘は天国でいつも家族を見守っているのです。妖精になって。

ようせい

秋の小さなようせいが

たくさん見えるようになった

いちじくの実にもいちじくの木に草花にも

秋の小さなようせいは かくれんぼ

葉や実を赤くそめたり黄色くそめたりしながら

地面に落ちたようせいは 風とダンスをおどっている

ようせいと風のかけっこはきりがいい

ようせいと風は走っていく

どこまでも どこまでも

上書きされない景色

土岐 英梨子

大学進学を機に親もとを離れ、年に何度か帰省するという生活を送るようになって、故郷での日々は否応なしに細切れで飛び飛びのものになった。帰るたび、其処此処に大小の変化がある。古いものが新しくなり、あったものがなくなり、なかったものができている。それは実家にある家電であったり、近所の家であったり、町中の店であったりする。新しくなったりなくなったりできたりしたものは、久々に帰ってきた私にとっては特に、しばらくの間は違和感があつて新鮮で、その違和感や新鮮さを確かめようと、まるでかさぶたでもいじるみたいにしつこく眺めてしまう。それでも多くはそのうちに目に馴染んで、「そういうもの」として上書きされていく。慣れ親しんだ景色が知らない間に変わっていくことを、さびしくせつなく思いながらも。

しかし、今回は違った。

先日帰省すると、縁側から見た空がやけに広がった。隣の神社の木が切られていたのだ。切られたと言つても伐り倒されたわけではなく、上に長く伸びた枝が剪定されたにすぎなかったのだが、私たち家族にとっては大問題だった。

その木が何の木なのかはわからない、けれど背が高く、枝が長く、いつもこちらを覗いていて、風が吹くたび、枝々がまるで指先のように、やさしく空をなでていた。風が吹いているかどうか、吹いているとしたらその風がどのくらい強いのか知りたいとき、この木の枝の揺れ方でそれを計った。激しい夕立、気まぐれな突風、荒れ狂う台風に見舞われると、何とはなしに家族が縁側に集まり、この木の枝が、怯える人間たちを尻目に、いつもより大きく、どこかはしゃいでいるかのように景気よく揺れているのを、飽きることなく眺めた。私たち家族にとって、その木は外を見ればいつだって目が合う、心やすい隣人だった。その木が見えなくなっていたのだ。母は、この木の枝が切られつつあることに気づくと、急いで止めに行きさえしたらしい。

もしかしたら、我が家よりもこの木に近い家々は、以前から大量の落ち葉に困らされていたのかもしれない。枝を切るからにはそれなりの事情というものがあったのだろう。なるほどこの木から少し距離がある我が家はのんきだったわけだ。しかし、だとしても、馴染み深い隣人の姿が突然に見えなくなったことは、やはり納得できなかった。

剪定をしていた顔見知りの庭師さんによると、二年ほど経てば枝はまた元の高さまで伸びるだろうということだった。二年。長いようで短く、短いようで長い時間だ。そして、一度切られてしまったということは、元通りに伸びてもまた切られてしまうということではないか。

少し経って、今まで経験したことのないような凄まじい台風がやってきた。我が家では雨樋や雨戸、倉庫の扉が外れて飛んでいき、近所には外壁が剥がれた家さえあった。

裏のおじいさんが怒つとつた。今回の台風がひどかったのは、あの木が切られたでやって。あの木はこの辺の防風林みたいになつとつたんや。帰宅するや母が言った。このあたりの人々は口々にそう言っているらしい。

なんだ、みんな私たち家族と同様に、いつもあの木を見ていたのだ。あの木が切られたことを知っていたのだ。私たちはみな、あの木の枝が元通りに伸びて、屋根々々の向こうから顔を出すのを待っているのだ。まるでみんなが、あの木の枝の不在に慣れてしまったりはしないと、見慣れた風景を上書きしてしまったりはしないと、取り決めたかのようにだった。これから先、あの木の枝が何度切られることになるとしても。

それから間を置かずして、私は再び故郷を離れた。帰省から戻るといっただってさびしい。久方ぶりによくつなげたものを、無理矢理に引きちぎられるような気分になる。

しかし、今回、私の心は不思議に落ち着いていた。

みながかれを、あの木の枝を待っていること、それを知っていること、そして私もまた、自分の中の景色を上書きしないと決めること。そうしてかれを待つことは、故郷を離れた私を、細切りにされた、故郷で過ごす私の日々を、あの場所に、ひとつに、つないでくれる気がしたのである。

今度帰ったら、私は思う。あの木が何の木なのか調べてみよう。自分の中に、あの木の名前を置いておくのだ。

ブリ、ちようでえ

片山 ひとみ

「一列に並べえ。味見の数は十分あるけえ」

婚家の裏庭から、義父の野太い声が響く。

小学生の五人の孫娘たちは、手に白い丸皿を持ち、体育授業のように背の低い年下から整列した。はやる心を映すように小さな体が右に左に揺れる。後ろを向いて変顔する子、わざと前に進まない子、笑い声が弾ける。

年末。岡山と兵庫県境の港町で義父母が暮らす婚家に、長男家族の私たち四人と次男家族五人が、おせち料理作りの手伝いに集う。

年に一度の大賑わいの仕事だ。

「たれが、ぎょうさんかかったのがええ」

「焦げたのはいらんよ。にげえから」

孫娘たちは、遠慮なく口々に要望を告げる。

しゃがんだ義父の前には、七輪。

今朝、瀬戸内の魚市場で丸ごと一本購入、義父が分厚くさばいたブリが鉄網の上に並ぶ。

薄ピンクの身がジュウジュウとしきりに音を立てている。表面から出た脂は、木炭の上に落ち、ジュツという音と炎を上げると同時、煙が立ち昇る。その煙が肉厚のブリを燻すように包み込んで、は周りへ広がってゆく。キツネ色の焼き目がつき始めると、身は美しく引き締まり、香ばしさをさらに漂わせる。

近所のフジ猫も喉を鳴らせてやって来る。

義父は、そばに置いていた大鍋の蓋を取った。昨夜から作って寝かせていた、味醂、酒、醤油を煮詰め生姜を加えた特製タレだ。

お玉でステンレスのボールに移すと、刷毛で丁寧に表面に塗ってみせた。

「塗るのは二回まで。黒うなるからな。黒すぎるのは見た目が悪い。料理はな、目でも食うものじゃからな。タレは、味付けの役目もあるけど、ブリの化粧でもあるんじや」と、助手をする私に指示。

次々に身から流れ落ちるタレは、さらに香ばしい煙を上げ、ブリにまとわりつく。

ブリの脂と、義父特製タレの甘辛い醤油、生姜の爽やかさが混じり合ってゆく。

鼻腔を膨らませる孫娘たち。

義父は、

「一々言わんでも皆の好みは覚えとるで」と苦笑いし、差し出された皿へ載せていった

私が結婚し、はじめて迎えた冬だった。

「我が家の味を覚えて欲しいんじや」

義母から電話があった。一人、車で向かう。

家の裏の畑で育てた大豆、人参、大根、里芋、しいたけなどを昆布とコトコト煮る義母。

「うちの煮しめは、雑多煮なんよ」

と、照れ笑いする背後で、

「おお、来たんか。わしの愛も伝授せんとな。裏庭へ来てくれ」

と、七輪を抱えた義父が、裏口から嬉しそうに手招きした。

高校一年の春、私の母は癌で亡くなった。入院わずか二週間。心の整理もできなかった。

以来、父と一つ違いの妹の三人で迎えるお正月は、かまぼこほうれん草を浮かべた、すまし仕立てのお雑煮一品だった。男手一つで二人の娘を育てる父は、大晦日まで働いた。

お正月に、祝い料理を味わうことは、母を亡くして火の消えてしまった我が家には、心のエネルギーがとてつもなく必要なことだった。三が日でさえ、家族のために忙しく立ち振る舞った亡母の背中が目に浮かび、「私たちだけが」、という申し訳なさもあった。

だから、より一層心ときめくものだったのだろう。

義父の豪快で繊細なブリの照り焼きが。

色形、香りまでが、「おめでたい」、招福の逸品だった。

口に入れた瞬間、程よい弾力と上品な甘辛さ、鼻に抜ける炭で燻された香りと、私をじっと見つめる義父の温かい眼差しに感激し、涙が込み上げて来たのを思い出す。

「わしは、形ある財産は残せんけど、味という財産は残せるからな。わしの愛は、このブリの照り焼きじゃ」

そう言っ胸を張った義父は、レンガ会社を退職直後、脑梗塞で右半身不随となった。

七十三歳で亡くなるまで、私や義母が支える腕の中、震える手でタレを作り続けた。七輪の前に座椅子を置いて座り、慎重に焼き目とタレを塗るタイミングを見計らう。助手の私に指示を出し、自らも利き手ではない左手で、刷毛をぎこちなく動かし、愛情いっぱいブリの照り焼きを次代へと繋いでくれた。

大晦日、義母とブリを焼く。

焼き具合や味の再現に苦心しながらも、義父の真剣な目つきや眉間のシワ、仕上げた満足感で緩む口元が脳裏に浮かび、「煙が目にしみるわ」と偽って涙をそっと拭ってきた。

大学生になった孫娘たちが一列に並ぶ。

「ブリ、ちようでえ」の声に、あの頃が蘇る。

「わあ、おじいちゃんの味にそっくりじゃ」

小躍りする孫娘。義母と頷き合い微笑む。

義父が伝えてくれた一族への情愛は、今年も甘辛い香ばしさとともに新春を呼んで来る。

あくまで天使

福井県仁愛女子高等学校 島田 萌美

赤ちゃんのおいがした。それはミルクのおいなのか、お母さんのおいなのか、よくわからないけど、とても甘くて守りたくなるようなにおい。しかし同時に憎いという気持ちが湧いてきた。それはドロドロしていて胸のあたりが痛かった。

小学校6年生の冬。私たち家族はそわそわしていた。今夜、赤ちゃんが生まれるというのだ。それはつまり私に妹ができるということ、私はとても興奮していた。家には赤ちゃんを迎え入れるためのベビーグッズが増えていった。お父さんもおじいちゃんおばあちゃんもうれしそうでもちろん私もうれしかった。生まれてくるのが女の子だということは分かっていた。人に言うともちろん私にいいほど毎回驚かれるのだが、私達は二人姉妹である。つまり十二歳差の姉妹だということだ。一人っ子はわがままで、なんて最初に言い出したのはいつたいどの誰だろう。しかし確かに私はわがままで、そして甘えん坊だった。そんな私は妹ができるということが、姉になるということが、どんなに大変でどんなにつらいことなのかというところまで考えが及んでいなかった。

天使みたい。まずそう思った。触るとふわふわしていて、食べたなら絶対おいしいな。そう確信した。私の好きな本にこんなフレーズがある。

「赤ん坊というのは、その弱さで一人では決して生きられないから、神様が天使のように愛くるしく作ったのだという話を聞いたことがある。そのあまりの可愛さで、周りの人が思わず面倒を見てしまうように作ったのだと。」

なんて優しい言葉なのだろうと思う。そして私はこう思うのだ。私は親から、父から愛されていたのだろうか。

妹と私は顔が全く似ていない。父親が違うのだ。私のこの胸のモヤモヤはそこからくるものだろう。私は父のことを憎んでいる。私のことを捨てたのだから。私はずっとそんな汚い気持ちを抱きながら生きてきた。それなのに妹はどうだ。みんなが妹の名前を呼ぶ。妹を抱く。妹にはほほ笑みかける。目の前のその光景を私はいつたいどんな顔で見ているだろうか。時には殺人鬼のような顔をしているかもしれない。私はそんなできた人間じゃないのだ。お父さんと妹がじやれているのを見て、「私はこんな風に父に愛されていただろうか。」ともらす。母は決まって「もちろんよ。」と言うけれども私は更にもじめになるだけなのだ。神様の一番の失敗は人間に赤ちゃんの頃のことを覚えておける能力を与えなかったことだ。おかげで父との思い出がない。

ふわふわの小さい生き物が私にはほほ笑む。嫌いだ。この笑顔が嫌いで、そして自分が嫌いなんだ。私はどこまで堕ちていくのだろうか。こんなに可愛い生き物が私の心を汚していく。悪魔の様に。

姉の役目はもちろん妹を守ることである。妹が泣いたら「どうしたの？」と優しくあやし、おむつも替えてあげる。なんていい姉なんだろう、そう思う私は醜い人間。

妹が少し言葉を話すようになってきた頃。私は妹のそのおいしそうなほっぺをぶにぶにしてい

た。そうしたらその天使は口を開いた。

「ねえたん。」

ああ、全くなかないや。神様の作戦は大成功だ。こんな愛くるしい表情で私のことを呼ぶ生き物を私は愛おしく思わずにはいられないじゃないか。『可愛いは正義』とはよく言ったものだ、そう思っていたがその通りだ。妹のその一言が、私の憎悪の気持ちなんてどこかへ飛ばしてしまうのだ。

妹はやはり今日もみんなから愛され、すくすく育っている。相変わらず私はさみしい心を持ち続けている。でも、

「ほら、おいで！」

この妹をとことん愛してみよう。そう思うんだ。私がさみしかった分も。

心から、誠実に

福井県立高志高等学校 竹内 陽香

「物事を学ぶということは、みんなの幸せを作り出すための方法を知ることなんだよ。」

難しい課題に出会う度に、科学館のイベントで出会った宇宙飛行士さんのこの言葉を思い出す。しかし私は、そんなことを言えるのは一部の人達だけだろうと思っていた。たしかに宇宙飛行士になったら、宇宙の研究をするのに理科や数学、研究をまとめるには英語も必要だ。でも普通の人は違う。私の母なんて、大学で英語を学んだのに、今は全く英語を使っていない。やはり、幸せを作り出せるのは、限られた一部の人だけなのではないだろうか。

辛かった大雪の季節をようやく乗り越えたところ、新高校一年生の物品販売があった。制服と体操服のサイズを確かめ、教科書を受け取った。かばんが重たくて、動くのも億劫だったので、母の

「陽香は、英和辞典いらないでしょう？」

という確認の質問に、何も考えずに相づちを打ってしまった。母が昔使っていた辞書を、そのまま使えばいいやと思っていた。

高校生になると、周りの皆は新しくぴかぴかの教科書と一緒に、ピシッと角のどがった光沢のあるカバーに入っている、表紙と背表紙に金の印字が刻まれた、真新しい辞書を持って来た。一方、私が持って来たのは、母が昔使っていたという辞書で、カバーの角は曲がり、表紙の印字はかすれている。紙は黄ばんでいて、母が昔調べた単語には赤線が引いてあった。これでは、自分が新しく調べた単語と、母が調べた単語の見分けがつかないではないか。私はその日のうちに、黄色い蛍光マーカーを買いに走る羽目になってしまった。やはり、新しいものを買ってもらえばよかったです後悔した。

実際にその辞書を使っていくと、黄色いマーカーが大活躍することに気がついた。というのも、私がつまづいた単語には、必ずと言っていいほど母の赤線が引いてあるのだ。母の赤線は単語だけでなく、その単語が動名詞と不定詞、どちらを目的語にとるのかや、文型の違いでどのように意味が変わってくるのかという細かい部分にまで引いてあった。娘である私がそれを黄色く書き添えてゆくその作業は、一つひとつ母の学びの跡を辿っていく、例えるなら観光名所でスタンプラリーをするのに似た楽しさがあった。たまに赤線を引いていない単語に出会うと、母に勝ったぞという喜びも感じた。

この辞書の1ページ目に、ある言葉が書いてある。「Yours sincerely」日本語でいう、「敬具」と同じ意味で、打ちとけた友人というよりは少し遠い立場の人の手紙に添える、結びの言葉なのだそう。鉛筆で書かれていたのでおそらく母が書いたのだろうが、母ははっきり覚えていないという。「sincerely」には本来、「心から」とか「誠実に」といった意味がある。赤ペンでたっぷり書き込みがされた母の辞書は、三十年前私と同じ高校生だった母が、学習者として、「心から」「誠実に」英語と向き合った日々のあらわれではないだろうか。そうやって積み重なった日々が、

母なりの「幸せ」を形づくったのではないか。そう考えると、私は自分がこの古びた辞書を無性に愛おしく思っていることに気づかされるのである。

「Yours sincerely」という言葉とともに母の辞書は、高校生の母からは遠い立場にいる、高校生の私へと引き継がれていった。これから、私はこの辞書からたくさんのことを学んで、自分だけの幸せを作っていくのである。その過程には、もう勉強なんてやめたいと思うくらい辛いこともあるかもしれない。そんなときは、赤ペンを目で追って、私に託された母の努力の跡を感じ取ることにしよう。そうして心から学びに向き合って、私だけの幸せをつくっていくのだ。

お寺さん行ってくるわ

福井県立高志高等学校 丸木 玲慶

寺社仏閣が好きな私は今までに様々な寺や神社へ行った。先日南都の寺々を巡った。當麻寺、阿倍文殊院、聖林寺―国によって国宝や重文に指定されている、荘厳な寺ばかりだ。その中で、今までに感じたことのない、異様な印象を受けたのが、薬師寺であった。薬師寺に向かう道中の、遠くに聳え立つ西塔の放つ鮮やかな気品、南門をくぐり、目の前に立ちほだかる力強く美しい金堂、そして金堂内部に鎮座し威厳を醸し出す薬師如来像と繊細優美な日光・月光菩薩像―初めて訪れたということもあるのかもしれないが、あまりの壮大さに圧倒された。しかし私が受けた異様な印象とは、右のような感動ではない。私が南門をくぐり左右に西塔と東塔、目の前に金堂という空間に置かれた時、私は、養老年間の人々と、自分は同じ地に立ち、同じ感動を覚え、同じくその気品に圧倒されているのだろうか―自分は千三百年前の人々と同じ日本人としての感性を共有しているのだろうか―と平城京の時代を懐古するような思いがした。

薬師寺は仏像や東塔や東院堂を除けば昭和再建の寺院であり、創建当時の姿を伝えている。それまでほとんどが現存している、または再建が未だなされていない、いわば古い寺を訪れてきたため、目新しい朱色と常磐色のコントラストの美しい建造物やその中の仏像に圧倒され、養老年間を懐古したのも当然だと言えるだろう。実際、黄金に輝く相輪や、朱色と白色を背景に見る仏像は新鮮な印象を与えた。しかし、しばらくして私はこの異様な印象を「異様」と感じたことに異様さを感じた。昔から残る遺跡を体験して過去に想いをはせるのは、考えてみればあたりまえのことだからである。そのため、これを異様に感じたということは、これまで訪れた寺々に異様さがあるのではないか、という疑問が起る。

聖林寺の十一面観音像、當麻寺の最古の乾漆像、法隆寺の美術品、寺に限らず美術館で展示されている屏風や絵巻物―これらはガラスの向こうにあるか、またはセンサーによってまもられていた。十一面観音の厳しい視線にさらされて、もしくは屏風や絵巻物の描線の繊細さを目の当たりにして、確かにそれらが「貴重」で「受け継ぐ」べきものであることは実感した。だが、薬師寺で感じたように当時の人々の営みを生々しく想像するようなことは無かった。巻物や屏風に筆をはしらせた絵師の姿、美術品を楽しんだ当時の人々の姿や感動、仏像を崇めた人々の信仰の様子―が思い起こされることはなかった。何百年、何千年も前の日本人との繋がりを感ずることはなかった。一体、私たちはこれから「貴重」な文化財をどう受け継ぐべきなのか―何を受け継げば伝統を受け継ぐことになるのか―。

私は日本の文化財保護の在り方に疑問を感じた。果たしてガラスや柵やセンサーで防御して破損を未然に防ぐ、あるいは損傷の進行を遅らせることが文化財保護と言えるのか。

書き残したが、過去に訪れた寺では襖が外され、もしくは在るべき所に仏像がなく、美術館や博物館に保存されているということが何度もあった。これら美術館や博物館での展示物は断片に過ぎず、当時の人々の在り様を知ることにはできないし、感性の共有もできない。

また、生活空間から切り離された美術品を見てもそれが文化の中でどの位置に属し、どのよう

な役割を担っていたのかも分からない（例えば、襖絵は部屋を取り囲むことで古くから伝わり、日本人に影響を与えてきた思想や風水を表していたが、一枚一枚横並びにガラスケースの内部に並べられることでそのような役割を果たせなくなっている）。ガラス越しあるいは柵やセンサーにより隔離された仏像や建造物にも同じことが言えるだろう。なぜなら当時はそんなものは無く、人々はあるのままの姿に接していたため、そこに私たちとの隔たりができていたからである。「お寺さん行ってくるわ。」と寺へ行くことはできないのである。

本当に受け継ぐべきものは、遺構自体ではなく、その遺構が与えてきた文化的影響や当時の人々の精神なのではないか。遺構が守られても、それらの文化的位置付け、影響、そしてそれらが表す日本人の精神が受け継がれなかったら、遺構はただのモノに過ぎない存在になってしまうような気がする。近代的思想、西洋風の生活が広まり、日本人の伝統的に受け継がれてきた文化や生活、精神が蔑ろにされている現在においては尚更だ。

私は、時の変遷を感じさせる色彩が微かに残る建物や木目の浮き出た仏像に無上の美しさを感じ、それこそが日本の伝統の美であるとしてきた。しかし、再建され当時の姿を取り戻し、伝えられている薬師寺は「文化財保護」とは何かをこんな私に教え、私の思想を圧倒と共に覆した。

命を学ぶこと

福井県立藤島高等学校 矢尾 颯大

テレビで動物を見ると、僕は自然とあのラットのことを思い出してしまふ。彼は急速に冷たく、そして死後硬直で体がだんだんと硬くなっていた。しかし、彼のあたたかく柔らかい内臓の感触は今でも手に残っている。

僕は先日、ラットの動物解剖実習に参加した。「生き物」の不思議さに興味を持っていたためだ。体の仕組みは一体どうなっているのか。本当に教科書通りで、僕が昔から習ってきた通りの仕組みなのか。そんな純粋な疑問があり、一度自分の目で確かめてみたかったのだ。

実習が始まると、最初に今回の実験動物、ラットと触れ合った。

「彼らは人の手によって、実験のためだけに育てられたラット。とても清潔な環境で丁寧に育てられたので、感染症の心配はありません。それどころか、君達よりも清潔かもしれませんよ。」そう講師の先生はおっしゃった。実際触れてみると、これから解剖されるなんて想像もできないほどかわいく、元気に動き回っていた。

「法律で実験動物の苦痛はなるべく軽減しなければならないと決まってるので、今回は全身麻酔を行います。」

そんな説明が入り、彼らは麻酔薬の入ったプラスチックの容器に入れられた。初めは、容器の中で元気に動き回っていたが、だんだん動かなくなっていたのを覚えている。

そしてついに解剖の時。諸注意の後、各班にラットが用意され、解剖がスタートした。班の皆で協力して、体を固定。そして腹を切ると、生命の神秘がそこにはあった。ラットの白い毛とは裏腹に、濃淡さまざまな紅い臓器。見ているうちに僕は今までに習ってきたことが覆され、知識が更新されていくように感じた。

例えば肝臓。教科書ではひとかたまりで描かれていたが、実際に見るとそんなことは無く、キノコの傘のようで、何層か重なっていた。次に小腸。僕は取り出すとき、一本の管の管を想像していたが、実際は全く違っていた。取り出すと小腸の始めから終わりまでひとかたまりになっていた。僕たちが驚いていると、

「これは、腸間膜という膜で小腸がつながっているからなんだ。一見乱雑に収納されているように見えるけれど、きれいに扇形に収納されているんだ。」

と先生が補足してくれて、
「小腸が体内でぐちゃぐちゃにならない理由はここにあるんだなあ。」
と僕はうまくできた構造に感心した。

こうして解剖が進んでいき、僕が最も見てみたかった、「脳」の解剖をすることになった。頭蓋骨は思っていたよりもやわらかかったが、脳を傷つけないようにはがしていくのは大変だった。しかし、すべてはがし終えて脳を取り出して見てみると、その小ささに驚いた。両手に乗る大き

さのラットから、人差し指に乗るくらいの大サイズの脳が出てきたのだ。

「こんなに小さい脳が信号を出したり、情報を処理したりしているのか。」
声に出してしまったが、それほど小さかったのだ。

解剖中は知識欲が満たされていたが、集中していた反面、自分の時の流れは速く、あっという間に時間になってしまった。ふと我に返ると、

「ああ、このラットたちは死んでしまったんだなあ。」

という感謝と悲しい気持ちで混ざった、複雑な感情になった。それと同時にラットの感触、下がっていく体温も思い出した。僕が得た知識と経験の代償。命。その尊さと重さを感じながら、

「僕のために命をありがとう。決して無駄にしない。これからの勉強に役立てます。」
と心の中で呟いてお別れをした。

僕の将来の夢は医者だ。命をダイレクトに救える職業であり、僕も何度も医師にお世話になった。

これからますます頑張っていきたい。今回の実習のような命の尊さ、重さを伝えられる、そんな医者になるために。

握手に込められた思い

福井県立藤島高等学校 谷口 果子

「いつてらっしゃい。」「いつてきます。」そう言いながら握手をする。私と母の毎日の日課。握手をすると、気分が晴れない日も母の温もりに包まれて不思議と笑顔が出てくる。そして、学校への足取りも軽くなるのである。

少し前までの私は、どうして握手をするのか深く考えたことはなかったし、当たり前だと思っていた。しかしある日を境に、私の中で意味ある大切なもの変わった。

中学生の頃である。部活、勉強、友達、様々な悩みが重なって自分の頭では消化できなくなり、母に相談したことがあった。その時に、母が私に渡してくれたのが母子手帳と妊娠中に書いた「日記」だった。そこには、母の丁寧な字でびっしりとその当時のことが詳しく書かれていた。

私がお腹にいることが分かったところから日記は始まっていた。家族みんなが喜んでいた矢先、妊娠四か月に入っただけのことだった。玄関でかんだ拍子に破水してしまったのだ。まだ目立たないお腹、ほんの数センチの私。病院では、助かる確率は十パーセントあるかどうか……と言われたそうだ。とにかくすぐに入院し絶対安静、寝返りも自由にしてない生活が始まった。日記には、こんなに毎日点滴をして薬を飲んで赤ちゃんは大丈夫だろうか、そして置いてきた二歳になつたばかりの姉に「ごめんね」という言葉が書かれていた。

私を妊娠する前に二度の流産をしていた母は、どうしても私を産みたかったそうだ。帰りの遅かった父は、なんとか仕事をやりくりし、姉の寝る時間に合うよう帰ってきてくれていた。祖父母は姉の保育園の送迎をし、父が帰ってくるまで姉をみていてくれた。

長い入院になったがやっと破水が収まり、安定してから退院。その頃には、お腹はもう大きくなっていった。元気にお腹を蹴る私。姉は喜び、お腹を撫でて話しかけ、歌もたくさん歌ってくれたらしく私は嬉しくなった。

しかし、これだけでは終わらなかった。次に検診にいった時、またもや即入院を告げられたのだ。子宮口が開き始めており、このままでは2・3日のうちに産まれてしまうという。しかし、今産まれてしまうとまだ目や耳の機能が出来てない。母は、また安静入院の生活に戻ってしまった。

前の日記には不安な気持ちがたくさん書かれていたが、今度はお腹が大きくて私の動きが感じられる分、前向きなようだ。産まれてきたらこんなことがしたい、家族でここへ行きたいなど楽しみな未来が書かれていた。そして「どうか無事に生まれてきますように。」と毎日祈ってくれていた。そうしているうちにひと月が経ち、予定より一か月早くはあったが、私は元気に生まれてきた。

ちよつとのことで消えてしまいそうな命。そんな状態で何度も生まれてきそうになる私を母は信じ、励まし、大丈夫だよと語りかけてくれていた。

家族のみんなや病院の先生の協力のおかげで、私は今ここにいることができるのだということ

を初めて知った。

私の悩みは、なんてちっぽけなものなのだろうと思えてきて、私の目には涙が溜まっていった。すると母が、

「私も、たくさん泣いたよ。」
と言って、笑った。

悩みは、消えるものではない。けれども、心の持ちようひとつで心はずっと軽くなる。母は、あの母子手帳と日記でそのことを私に教えてくれた。

ありがとう、お母さん。そして今、私は母の身長を追い越し、充実した日々を送っている。毎日の握手の意味を噛みしめながら。

「行ってらっしゃい。」

「行ってきます。私の最高のお母さん、今日も一日精一杯生きてきます。」

“あなた”へ

福井県立大野高等学校 齋藤 萌

あなたを初めて認識した時、あなたは縁のないめがねの奥で目を優しくそうに細めていました。その目はまるで、私の事を心から愛してくれているように見えました。でも、額縁のあなたの顔はいつまでも変わらなくて。そこであなたの七回忌だったことに気付きました。

雪が溶け私達の元にも春陽が届き始めた頃、お父さんは天国へ旅立ちました。私が二歳の時でした。穏やかな春空の中、お父さんは空へ飛んで行きました。悲しいことです。でも、好き嫌いの判別がつくようになったばかりの私にはそれが悲しいことなのかは分かりませんでした。今となっては、後悔するばかりです。まだ幼い私はお父さんの顔、声、体温の何一つとして覚えておくことはできませんでした。

保育園にあがった私は嫌いな物ができました。六月の第三日曜日、父の日です。保育園では全員が自分の父親の似顔絵を描きました。その中で、私だけ、母親の似顔絵を描いていました。男の子からは「お父さんを描くんだぞ。」と馬鹿にされ、女の子からは「先生、萌ちゃんが違うの描いてる!」とよく指摘されました。彼らには当たり前にあるものが私には無いということに保育園児ながら大きな孤立感がありました。保育園の運動会に来るのは母でしたし、その母も最初から最後までいるということは無かった気がします。スーパールのガラス窓に貼りつけられている園児達が描いた愛くるしい父親達と、反射して写る私の顔を見て、そこで生まれて初めて実感しました。

「私にはお父さんがいないんだ。」

小学校にあがりました。ピカピカのランドセルをかついで母と手を繋いで学校へ行きました。新しい友達、新しい知識。自分はピンクの色が好きでかわいいものが大好きでした。どこにでもいる普通の女の子のように感じて父親のことを忘れさせてくれるようでした。

青々と茂っていた葉も美しい紅や黄色に変わり、肌寒くなってきた日、友達が不意に言った言葉が今でも忘れられません。

「私、お父さん嫌い!」

頭をガツンと殴られたような気がしました。なんで。どうして。それしか頭に思い浮かばなくて。私が覚えてすらいらないものをそんな風に。どうしてそんなことができるの。贅沢すぎるよ。それなら私に頂戴よ、ねえ。何にも追われていないはずなのにその場から全速力で逃げました。

友達も軽い気持ちで言ったのでしよう。でも私にとっては理解できない言葉でした。心なしか、肌寒い秋風がさらに冷たくなって私を嘲笑うかのように吹いている気がしました。

祖母は「萌ちゃんは父さんと母さんの間に生まれた奇跡の子なんだよ。」とよく私に言い聞かせました。私は本当に奇跡の子なのでしょうか。誰かの一言で涙が出るほど傷つき、当たり前のものすらロクに持っていない。特別な才能を持っている訳でもないし、全ての人から愛されるような人でもない。

自分が奇跡の子なのか、未だ結論は出ていません。でも確かに私はお父さんとお母さんの愛情でつくられ、生まれ、今、息をしているのです。この不条理で悲哀に満ちた温かく美しい世界に立っているのです。その事実は奇跡と言って良い程、偶然のことなのかもしれないかもしれません。私は、私達は、奇跡であり、その奇跡に感謝して生きていかなければならないのかもしれないかもしれません。

春霞が山を美しく彩り始め、ほほえんでいるお父さんと顔を合わせるといつもこの事を思い出します。お父さんのほほえみは私への肯定なのでしょう。哀れみなのでしょう。

私はあなたから預けられたこの命を精一杯生きていますか。あなたがくれたこの命を大切にできていますか。ねえ、お父さん。

競技かるたから学んだこと

福井県立高志高等学校 笹岡 杏紗

「ながらへば——」

私は自陣右下段に手を伸ばし、ほっと息をついた。同時に、それまで水を打ったように静まり返っていた会場が、大きな拍手に包まれた。

この日、私は競技かるたの大会で優勝し、一番上の階級であるA級への昇級を決めた。中学三年生の五月のことだ。小学三年生の時に競技を始めてから六年余り、ついに自分の目標の1つを達成することができた。

競技かるたは、集中力、瞬発力、時には忘却力をも求められ、心技体すべての要素がそろっていないければ頂点に立つことはできない。所属会や選手個人によって、取り方のタイプが全く異なる点が魅力の一つだ。私が所属している全国屈指の強豪、「福井渚会」は、「攻めかるた」が大きな特徴だ。札は自陣と敵陣に分けて並べられ、主に敵陣を狙うことを「攻めかるた」、反対に自陣を堅く守ることを「守りかるた」という。私は、幼い頃からこの「攻めかるた」を貫いてきた。私が大切にしている言葉の一つに、「苦しいときの敵陣右下段」という言葉がある。これは、昔先生から教わったもので、どんなに劣勢でも攻め続けるという意味が込められている。敵陣右下段は自分から一番離れている場所で、札を取りにくいとされているが、自分が負けていても攻めの姿勢を曲げないことで、自然と自分に流れが傾くのだ、と言われた。そしてこれは、かるただけではなく何事においても生きてくる言葉だとも言われた。

あの大会の決勝戦、私は終盤でミスをしてしまい、相手があと一枚取れば負け、というところまでできてしまった。もちろん、私は諦めたりはしなかった。読手から発せられる最初の音に全神経を集中させ、勢いよく札をはらった。敵陣右下段だった。私は、「流れがきた」と思った。そしてついに、互いが残り一枚になった。この場合、敵陣の札を取ることは非常に難しく、選手は皆、自陣の札が詠まれることを祈るしかない。だから、互いに残り一枚になった勝負は「運命戦」とよばれる。どちらの札が詠まれるか、もちろん自陣の札が詠まれる確率は二分の一だが、私は不思議と自陣の「ながらへば」が詠まれる気がした。ただの自分の願望だと言われてしまえばそうかもしれない。しかし、「運命戦は運命じゃない」なんて言葉もあるほどで、この試合で攻めの姿勢を貫いた私に、神様も最後まで自分は自分に味方してくれるのではないか、そう思ったのだ。試合終了後、たくさんの人が「よくやった、よくやった」と言ってくれた。相手が残り一枚になったあの時私の陣には五枚も札があった。自陣の札に集中した方がよかったのかもしれないが、敵陣を攻めていなければ全く違う結果になっていたはずだ。

これから先、かるたの試合だけでなく勉強や学校生活などにおいて、つい弱気になってしまったり逃げ出したいなくなったりすることがあるかもしれない。そんな時、人は失敗を恐れて自分を守ってしまいがちだが、かるたを通して学んできたことを忘れずに積極的な姿勢を貫いていきたいと思う。

もっしえー

福井県立福井商業高等学校 佐藤 優佳

「もっしえー」
嫌いだった。大嫌いだった。福井弁で「面白い」という意味の「おもっしえー」という言葉。それを私の祖父流に変えた「もっしえー」を、祖父は毎日のように使っていた。本当に、大嫌いだった。

私が小学生の頃、平日の夕ご飯は祖父母の家で食べていた。両親が共働きで、帰宅が遅く、三歳上の兄と年子の妹と私の三人ではご飯を作れなかったからだ。祖父が、私たちを放課後学童保育施設に迎えに来た瞬間が、平日の地獄の始まりだった。

先生に、おじいちゃんがお迎えに来たよ、と言われる。小学校低学年だった私たちは、ランドセルを取りに走り、急いで靴を履いて外に出る。それが、UNOの途中であっても、一輪車でリレーをしている時であっても関係ない。じいちゃんを待たせないために。「もっしえー」と言われないうために。

祖父の言う「もっしえー」は、明るい言葉ではなかった。人を褒める言葉とはかけ離れていた。自分ならこんな馬鹿らしいことをしないし、何回注意しても直らないなんて理解力がなさすぎて、面白いわ。もっしえーにたどり着くまでに、そんなネガティブな言葉があったのだ。絶対に。少なくとも、小学生の私にはそう聞こえていた。

家に着いたら靴をそろえて靴下を脱ぐ。早く家に入って遊びたかった私は、しょっちゅうこの規則を忘れて、もっしえーと言われた。食べ物で好き嫌いをするのなら、なにも食べなくていい。銀杏をどうしても好きになれなかった私たちは、一生懸命それを水で流し込んだ。じいちゃんが一番うるさく私たちに言ったのは、箸の持ち方だ。ふわふわでジュシーでいいにおいのする世界一美味しいおばあちゃんのハンバーグを食べている時。きれいにハンバーグを切り分けられなかった私は、右手に一本、左手に一本箸を持ち、一口サイズにしていた。それを見たじいちゃんは立ち上がり、私の後ろに回った。え、私になにか悪いことしたかな。じいちゃん怒ってるのなんでやる？そう考え始めたのが遅すぎた。箸の持ち方が汚いんや。もっしえー。そう言ったじいちゃんは、後ろから私の手を取って持ち方を直した。じいちゃんのしわしわの手は、小学校の友達や先生にはいなくらい皮膚が余っていて、とても怖かった。じいちゃんの小指だけ伸ばしている手の爪のほう汚いが！思っても口には出せなかった。恐怖だった。逆らえなかったのだ。

私の心から嫌いだった言葉をよく使っていた祖父は、私が小学校五年生のときに他界した。たまに写真を見返すと、祖父の顔は私の記憶とかけ離れている。記憶の中では毎日怒る冬の悪魔みたいないちいちゃんだったのだが、写真の中の祖父は優しい笑顔で孫たちに向けた普通のおじいちゃんだ。私たちは祖父に大切に扱われていたんだな、と思わせる笑顔。温かく、柔らかい春の風のような笑顔。

思い返してみれば、祖父のおかげで、小学校のクラスの豆つかみ競争で一位を獲ったことがある。箸の持ち方が誰よりも上手だった私は、飛び抜けて多くの豆を箸で移動させたのだ。他にも、

祖父のおかげで、苦手な食べ物が本当に少なく、食べられないほど嫌いなものはない。中学生まであった給食の時間、食べ方や箸の持ち方が汚い子が、みんなに引かれていた。祖父は私たち兄妹がそうならないように、人の生活の基本の部分を何度も何度も教えてくれたのか。もっしえーは良い言葉だったのかもしれない。私たちの未来を祖父なりに開こうとしてくれたのだ。そんな幸せの言葉だ。少なくとも、今の私はそう解釈している。

高校生になり、来年の春から大学生になろうとしている今、私は多くのことに挑戦してきたし、しているし、これからするだろう。その度に祖父の口癖を思い出し、自分がなぜそれに挑戦したのかを、じいちゃんに説明しよう。じいちゃんが納得するような理由が言えるように、自分の考えをまとめて、鮮明にしておこう。

大好きなじいちゃんへ。私の「もっしえー」人生を、そこから見守っての。

夢のビワイチ

福井県立藤島高等学校 島田 蒼士

真夏の日差しの中、四つの影が疾走している。二〇一七年七月二十四日、私たちは練りに練った計画を実行に移した。

私は中学校時代の友人と、「チャリ部」という会を作って活動している。チャリ部とは自転車とサイクリングが好きな人たちが集まって、月に一度長距離サイクリングに行く会だ。これまでに、鯖江く勝山や福井く金沢などを走破していて、私は次のサイクリングの行き先を探すために、図書館で本を眺めていた。旅行コーナーを何気なく通りかけたその時、琵琶湖一周自転車の旅という背表紙が目にとまり手にとってみた。本を開くとまっ先に「ビワイチ」という文字が目飛びこんできた。当時私はビワイチが何なのか知らなかったが、その言葉にひかれて読み進めると、その本には、ビワイチとは自転車で琵琶湖一周をすること、琵琶湖は自転車道が整備されていて走りやすいこと、一周して協会に申請すると認定証がもらえること、そして、琵琶湖はサイクリストの聖地であることなど、琵琶湖の魅力がいっぱいつまっていた。私はすぐに友人たちに説明して、七か月後の夏休みにビワイチに行くことが決まった。

それから私たちはメンバー全員で分担して走りやすい道や絶景ポイント、休憩できるコンビニ、琵琶湖までの移動手段などを調べた。毎日朝早くに登校し、何度も話し合った。琵琶湖へは輪行袋という袋に自転車をバラして入れて始発の電車で行き、朝御飯は敦賀駅の乗り換えの待ち時間で食べ、予算が限られているので「青春18切符」を使う、というように計画を一つ一つ組み立てていくだけでもわくわくして心が踊り出しそうだった。しかしその一方で課題も見つかった。これまで百二十キロメートルを超えるサイクリングをしているものの、一周二百キロメートルもある琵琶湖を周るのは話が違う。一周したい気持ちも強かったが初めていく場所ですら夏なので暑さで体力が奪われることが予想されたのでコースは、近江舞子く木之本の約九十キロメートルを走り切ることを目標にした。こうして六月半ばには、ほぼ計画は固まった。七月上旬の期末テストが終わると同時に、私たちは輪行袋に入れる練習をした。簡単な作業だと思っていたが、初めは一時間かかった。これでは帰りの電車に乗り遅れてしまう。各自で練習を重ねポイントを共有して十分で入れられるようにした。自転車のメンテナンスも終えて準備は万全だったが一つ気がかりなことがあった。天気だ。予報ではビワイチの日はいくも時々雨となっていた。雨が降ってはせっかくのサイクリングが台無しだ。少々の不安を抱えながらも、前日は早めに寝た。

ビワイチ当日、目覚めるとすぐにカーテンを開けて外を見た。まだ四時台で少し暗かったが快晴だった。これで計画の最後のピースがうまった。四時五十分に駅に集合し乗車した。最高の一日が始まると思うとわくわくして、走り出す前から修学旅行の何倍も楽しかった。近江舞子駅に着くとすぐに自転車を組み立てた。みんな慣れた手つきで五分ほどで走り始めた。七時前の夏の朝のさわやかな空気の中を列になって走り抜ける快感は何よりも心地良かった。一時間に一回のペースでコンビニや道の駅で休憩をしながら走った。琵琶湖大橋の展望台から琵琶湖を一望でき、そこには水と空の絶景が広がっていた。その景色は、それまでに走った数十キロメートルの疲れ

をふき飛ばしてくれた。その後も順調に走っていたが、九時半を過ぎた頃には太陽が高く昇り、暑くなってきたので休憩の数を増やしてバテないように走った。守山市にある「サイクリストの聖地碑」を過ぎるとコースが湖岸から離れるので、湖から吹く涼しい風がなくなってしまった。より一層暑さを感じられ精神的に辛かった。それでも昼食をとる予定の彦根を目指して走った。彦根城近くのコンビニで手早く昼食をすませ、走り出そうとした時にアクシデントが起こった。メンバーの一人が座り込んでしまい、自転車にまたがることすら出来なくなっていたのだ。熱中症だった。私たちはその子を水道の所に連れて行き、頭から水をかけて介抱した。意識ははっきりとしていて病院に行く必要はなかったが、この後三十キロメートルを走ることは到底できそうになかった。安全第一はメンバー内であらかじめ決めてあるので、計画は断念して、最寄り駅から輪行して帰った。やはりあの暑さが原因だった。走破はできなかったが多くの良い思い出も作られた。教訓も学んだ。私たちは中学校三年生で受験があったのでしばらく活動は休止した。

そして今、私たちはまた新たな計画を練っている。「ビワイチ2」だ。今度は春休みに行く。体力も前回と比べるとかなりついたので、コースも長くして百六十キロだ。次こそは、全員で必ず走破してみせる。

日本人の優しさ、心の豊かさ

佐賀県早稲田佐賀高等学校 谷川 亘誼

富田林警察を脱走した犯人が逮捕された。徐々に逃走経路が明らかになるにつれ不謹慎に思われるかわからないが、私は嬉しい気持ちになってきた。日本人の優しさ、心の豊かさを感じさせる点を多く感じたからだ。犯人は、大阪市内で自転車を窃盗し、日本一周を装い四国へ逃げた。人の善意を利用し逃走を続けた行為は許しがたい。しかし、私は、視点を変えて、この逃走犯に接した人々の行為と犯人の心の変化について考えてみた。

四国八十八か所霊場めぐり、いろいろな思いを持った方が巡礼されているのに伴い、お遍路さんに接待を施す慣習が今も続いている。犯人も、七一番札所を訪れジュースの接待を受けている。日本一周中のプレートを見た地元の人が、ならばと接待されている。見ず知らずの人に、見返りを求めず奉仕する心、これこそボランティアであり、四国では、このような行為が脈々と続いている。お接待は、「お遍路ご苦労様、おもてなしをさせていただきます」といった心を表した温かい心と心の交流だと言われている。東京オリンピック誘致で脚光を浴びた「おもてなし」と共通する部分だ。

逃走経路にあたるしまなみ街道は、自転車でも利用でき、サイクリングのメッカと言われる存在になっている。そのため、お接待の生活文化が根付いている四国は、多くのサイクリストが訪れ、道の駅や公園で野宿しながら交流を深めている。

マスコミ等では、行動が大胆で善意を悪用していると評されているが、本当にそうだろうか。私の考えは少し違う。犯人は、二週間余りの四国の旅で多くの方から優しくされ、素直に受け入れられたことで、心を開いていったのではないだろうか。温かい心で接してもらうことで、本来の人としての心を見出したのではないだろうか。愛媛県庁を再度訪問し、「旅先でアイスクリームをもらった」「人柄がよく、きれいなところが多かった」などと四国旅行の感想を語り、職員に謝辞を伝えたという。このことは、大胆な行動をしたのではなく、人の気持ちのありがたさを素直に伝えたかったのだと思う。

また、山口県周防大島では、七日間滞在し道の駅の支配人に「周防大島で最高の思い出ができた。この旅でいろいろなことを学び、今後の生活の糧にしたい」と手紙を書いている。私は、この言葉は、犯人の本心を表した言葉だと思いたい。旅先で、様々な人と出会い、交流し、慈悲をかけられたと思う。その中で、過去の過ちを深く反省したのではなからうか。記念撮影に納まった彼の顔は、どこか誇らしく、希望に満ちた感じがした。

周南で万引きを行い女性警備員につかまっている。拘置所から逃走する気力があれば、振り切つて逃げられたはずだ。おとなしく、店外から事務所へ同行されたのは、心のどこかに、逃走することや過去の罪を反省したい良心が芽生えたのではないだろうか。

温かい心の交流は、どのような懲罰より、罪を犯した人を更生させる力を持っていると思う。

もしかすると、私の考え方は甘いのかもわからない。ただ、人の温かい心は、何人に対しても、自分を素直にさせる力を持っていると思う。罪を犯す人は、成長のどこかの過程で他人を信じら

れなくなり、素直な気持ちを表現できなくなった人だと思う。一度そうなると、負の連鎖で、人を疑いだますようになるのではないだろうか。

今回の逃走劇の中で、四国の多くの方々が、温かい心で接してくれた現実を見て、本当にうれしく思った。昨今、都会に限らず、人間関係が希薄になったと聞くことが多いが、まだまだ日本人の心には、他人を思いやる気持ちが宿っていることが分かった。

しかし、一つ懸念もある。今回の逃走劇で、善意を逆手にとって逃走したことが大きく報じられることで、善意を表に出す人が減ることである。最初から、見知らぬ他人を疑ってかかることは恐ろしい。すでに、自転車で野宿をしている人に、お前も逃走犯かと声をかける事案が報告されていた。非常に残念だと思う。

また、高知県警は職務質問で防犯登録の照合をしなかったと批判されているが、全ての市民を疑ってかかる警察が、よほど怖い。けっして、手を抜けと言っているわけではない。行動、表情で判断し取捨選択できる実力をつけてもらえば済む問題だと思う。もっとおおらかな世の中ではないのではないだろうか。

犯人のこそくさ、警察の失態、県職員の対応を批判するより、日本人の優しい気持ち、温かい心の交流を大々的に取り扱ってほしい。過去の報道をもとに私が持っていた近年の日本人のイメージより、現実には、はるかに人間味あふれる心豊かな人々が多いことが分かった。まだまだ、美しい心を持つ人が暮らす日本で安心した。